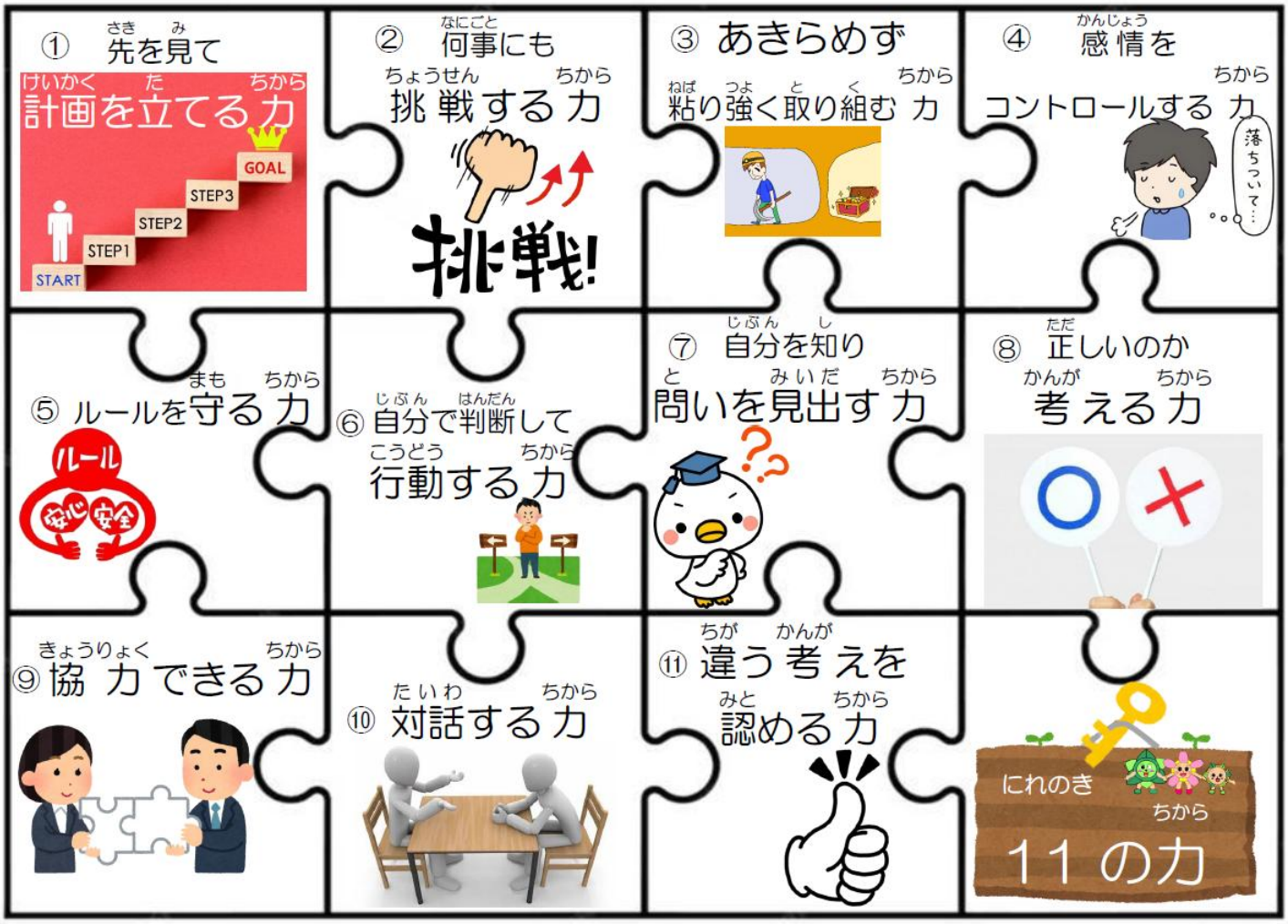
本日の話題は、楡木小が目指す子どもの学びの姿を示した「にれのき 11 の力」です。
以下に「にれのき 11 の力」を表にして示しています。詳しくは、「にれのき 11 の力」に続く通信本文をご覧ください。



R7 楡木小学校　学校通信
No.２７
なりたい自分になる！
In 楡木サラダボウル
令和７年１１月７日
文責　余宮

気が付くと 11 月。2 学期も折り返しを迎えています。子どもたちの学びも深度を高めています。

楡木サラダボウルの視点その２　「力」は発動させるスキル

今、楡木小学校では、学びの根本に「にれのき１１の力（前ページ参照)」を掲げ、毎日の学習に取り組んでいます。「力」とつくと、どうしても「もつ」とか「つける」のような動詞が連想されがち。「あの人、力をもっているもんね～」「彼は力をつけてきたようですね」など。確かに、「力」にはそんな一面もあるのかもしれません。

ただ、「力」をそのようにとらえた時、2 つの問題点が浮かび上がります。

本通信でもよく話題にしている「生まれつき」問題。そして、「力」の表裏の問題。

まずは「生まれつき」問題から。もちろんこの問題は、完全否定が難しい。例えば、にれのき 11 の力の「①先を見て計画を立てる力」は、生まれつきもっている人ができることであって、私はそんな力はないよ、と言いたくなる。わかる～。自分にはそんな力がないから、あきらめるしかないよね。実際。となりがちです。あっ、自分のことだ…😭

２つ目の表裏の問題はもっと深刻です。例えばにれのき１１の力の「②何事にも挑戦する力」は、一見素晴らし力に見える。ただ、もし目の前に激流があり、そこを勇猛果敢に飛び越えようとするような挑戦心が芽生えてしまったら。いや、だめです！ぜったいにしてはいけない！！飛び越えるために挑戦する力はつかっちゃいか～ん！！！

だから、私たちは「力」は「もつ」や「つける」ものではないと考えたい。

では、どう考えているのか。

「力」は状況や場面に応じて「発動する」ものだと考えています。

すべての子どもたちは、もともとにれのき１１の力のような素養を、その身に携えています。ただ、その発動のさせ方に課題がないわけではない。にれのき１１の力「③あきらめず粘り強く取り組む力」が一番わかりやすいですね。我が息子の話題で恐縮ですが、彼は幼少のころ、ほしいものが目の前にあるときに決まってこの力を発揮させるのです。「買って買って」くらいはまだいい方。泣き叫ばれるとお店にも迷惑がかかるので、しかりつけちゃいます。とほほ…。挙句の果ては、知らぬ間に買い物かごへ投入されている始末。買うまで粘り強く取り組む。ある意味、感心させられます。でも、これはよくないですよね。

何がよくないのか。

それは、発動のさせ方です。利己的な粘り強さは、やはりダークサイドだと言わざるを得ない。逆に、状況を鑑み、自身の「なりたい自分への道」を追究した粘り強さは、社会のウェルビーイングを促進し、周りの多くの人に勇気や希望を与えてくれます。そう、大リーグポストシーズンの活躍が記憶に新しい大谷翔平選手のように。そして、ここに至るまでの大谷選手の粘り強い努力は、多くの人が知る通りです。専売特許になった曼荼羅チャートにみられるように、目標を計画し、自身を挑戦へ奮い立たせながら、粘り強く取り組む。苦しいときもあったでしょうが、「感情をコントロール（にれのき１１の力④)」しながらのがんばりも周知の事実。そう、「力」は利他の視点をもち、環境や状況に合わせて発動させるスキルだ、という大変重要な事実を大谷選手は教えてくれています。

その肝が、発動させる経験と、その自覚（＝振り返り）ですね。